
彼女たちの最期の姿が、今でも脳裏に焼き付いて離れない。

合わせていた手のひらを開き、まぶたを上げれば。にじむ視界に、自ら涙していたことに気づく。

気取られないよう数回瞬きしたものの、

「ちゃんと泣けたみたいですね」

敵わない。

「……はい」

正直に応えた。

それから、

「手回し、ありがとうございます」

改めて礼を述べた。

百合ヶ丘女学院、英霊墓地。

その一角に彼女たちは埋葬されている。

「お礼を言われるほどのことはしてませんよ」

それに、

「貴方が直接お願いしてたとしても、許可が下りないなんてこと、ないと思いますけど」

「……あまり、騒がれたくなかったので」

その応えに、棗は「あゝ」と納得する。

神童とまで呼ばれた才能。その彼女がここを去ってからまだたった2年だ。覚えてない者の方が少ないだろう。

つい先日には御台場女学校への進学も決まって。すでに

いくつかメディアからの誘いもある。そのすべてを固辞しているのは、らしいといえ、らしい。

まあ、そこらへんの事情を置いておいても。

ここには、

「いますからねえ」

確実に。

大騒ぎするひと。

約一名。

それに苦笑で応えた。

領いてしまつてよいのか。

少々困る。

ただ、この時間を静謐なものにしておきたかったのは確かだった。

「私も邪魔なら退散しますけど？」

「いえ。先生には……お立ち会いをお願いしたいんです」

「そうですか」

そっけない返事。いまはそれくらいがちょうどいい。

再び墓前に向き合い、そこに刻まれた名を指でなぞった。

——山下絢子。

「私の、親友でした」

CHARMこそ携行していたが訓練用の第1世代機。簡単な行軍演習の予定だった。

今でこそ「ノインヴェルト世代」などと呼ばれているが、

その頃にはまだそういった呼び方もなく。ただこのままの戦い方では損耗が大きすぎる。そういった中、個々の技能だけでなく、集団戦術での戦闘スタイルが注目され始めた時期だった。

とはいえ、まだ初等部だ。実戦に赴くなどまだまだ遠い先の話。

あつたとしても上級生の同行の下。後方で討ち漏らしのスマール級相手に、皆で協力して一体ずつ倒していく。

あくまで訓練。

戦場に慣れるための。

その日の行軍演習も、百合ヶ丘周辺の地形調査とその把握だった。十人ごとの隊に分かれ、目標地点までを往復する。

「行軍演習」といえば重々しいけれど。

要するに息抜きがてらの遠足。

大人たちから子供たちへのちよつとしたご褒美。

そのはずだった。

事前の索敵では敵影は観測されず、帯同する上級生たちもいない。

すき抜けるような青空だったのを覚えている。

お小言のない遠出に浮かれる者も多く、どこからか歌声

も聞こえていた。

隣を歩く彼女も普段に増して明るい笑顔で。

私の手をずっと握って歩いていた。

温かい手の温度。

伝わってくるマギの温もり。

着いてからのお弁当が楽しみだとか。

実は自分も少し手伝ったんだとか。

そんなたわいのないことを無邪気にうれしそうに語りかけてくる姿に微笑みを返しつつ、結わえられた三つ編みの先をいじる。

「おそろいだよ」

そう言っただけで彼女が編んでくれたものだった。

浮かれていなかったといえは嘘になる。

しかし先頭に行く任を受けた以上、気を抜くわけにもいかない。

常在戦場。

周囲には常に気を張り、いつ何が起きてもおかしくないよう神経は尖らせていた。

異変を感じたのは帰り道だった。

少女たちの歩みは往路ほどの元気はなく。

散々遊び疲れ、あとは家に帰るだけ。

そんな彼女たちに制止をかけたのは、ガーデンのちょうど中間地帯。山中の一本道だった。

上がる不満の声を「静かに」の一言で押し止め、

「……違う」

何がとは言えない。しかし昼間通ったときと何かが違うと感じられた。

念のためCHARMにマギを込めるのを見て、空いた方の手を彼女が強く握りしめてきた。

普段は温かい手が、冷たく震えていたのを覚えている。勇気づけるように強く握り返した。

そうしながらも呼吸と一緒に五感を広げ、空間を吸い込むようにして神経を研ぎ澄ます。

吸って吐き。吸って、

——っ！

捕捉と同時に草影が揺れた。

鎌のように鋭い爪を刀身で受け止める。

起動しておいて正解だった。

スモール級ヒュージ。

初めて見たわけではない。

上級生について向かった戦場で、単騎でも何度か交えたことがある。

ただそれも、どこまでも訓練の一環。

今の状況は、違う。

訓練なんかじゃない。

『実戦』

その文字がよぎる。

即座に、

「救援をつ！」

しがみつく彼女に強く言い放った。

「下がって！ 助けを呼んで！」

このまま戦うのは危険すぎる。

(ごめんなさい)

肩を押し、無理矢理ふりほどく。

そして他の隊員にも、

「動けっ！」

普段は出さない気迫で硬直に行動を促す。

それでも背に隠れるようにする彼女に、

「走れ！」

敵はこの一体とは限らないのだ。

スモール級は複数体で行動するのが常。

周辺に潜んでいる可能性は高い。

しかし、まだ囲まれたわけではない。

少なくともここまでの道中、さつき感じた違和感はなかった。

居るとしたらこの先。

ならば、

「全員CHARMを機動。警戒しつつ、後方への撤退を開始！」

個体戦に持ち込めば、いつもと同じだ。

いつも通り。

訓練通り。

「殿は、私が務めます」

皆を、守る。

私が、皆を守らなければいけない。

強く心に言い聞かせた。

ヒュージの呼称はその大きさと分類される。

その中でスモール級は最も小さく、ヒトよりも少し小さいサイズと定義されているが。

……ヒトといっても成年。

身長伸びきっていないような幼い自分たちからしたら、驚異を感じるに十分な上背がある。

膂力も攻撃を受け止めるだけでまだまだ精一杯。手持ちの剣型第一世代機では明らかに不足だった。

……それも言い訳か。

こんな戦闘、予定になかったとしても。

……何が神童だ。

単に身体の成長が他の子たちよりも少し早かっただけにすぎない。

それを周りの大人たちにもてはやされるのは、正直うんざりだった。

自身の足りなさは、自身が一番わかっている。

だからこそ、

「合図で一斉射撃！」

ギリギリまで引きつけ、

「撃てっ！」

素早く身を伏せ、横に転がる。

その上を隊員たちの掃射が横切った。

いくつか外しているものの、急所は捉えた。貫通した巨体が後ろに倒れていく。

それを見届け、深い息を吐き出した。

これで、なんとかだ。

中等部や高等部生になどまだまだ及ばない。

だからこそその集団戦術。

ひとりでは困難でも、仲間となら……

「――」

声にならない悲鳴。

初めて耳にしたのはこのときだった。

すぐさま起きあがりその方向へ目を

「……え？」

先ほどまでいたはずの隊員のひとり。

その少女がいない。

否。顔が、頭が、ない。

代わりにあつたのは、初等部の制服を着た。

首から先が。

見下ろすと、それは地面に転がっていて。

脳が理解を拒否している間に、糸が切れたように胴体が崩れ落ちた。

「どういふ……」

反射だった。

再度振り下ろされるより先に、地面を蹴り、追いつき、爪を弾く。

頭が理解するより先に、身体が動いていた。

2体目。

さつきここを通ったときにはなかった気配。

回り込まれた！？

こんな短時間で！？

否。これが『普通』なのだ。

如何にこれまで自分たちが過保護に扱われていたのかを痛感する。

込み上げる感情はなんとか理性で抑えた。

激昂してはダメだ。

感情に流されるな。

冷静な判断を

いや、やめて、来ないで！

来ないでっ！

死にたくない！

隊員たちの声がどこか遠くに聞こえる。

違う。

すぐ側だ。

すぐ背後だ。

振り向きたい。

しかし振り向けない。

いま振り向いたら、この対峙している相手が！

振り下ろされる爪を今度は受けずに利き手と反対に構

えながらかわす。

そのまま精一杯の振り降ろしで、断った。

「撃って！」

応答はない。

射撃も来ない！

片腕は斬った。残るはもう片方の爪と熱線。ならばもう、それを最速の全力で。

斬るしか、

「ないっ！」

袈裟掛けに下からの裂帛の斬り上げ。

肉を断つ抵抗に腕の筋肉が軋む。

それでも振り切った。

その勢いを殺さず背後に迫った別の胴を断つ。

そこに見えた先にはもう、隊列などない。

詰められた距離を射撃用の機体で必死に応戦する隊員

の数は……

出発前の索敵ではヒュージの気配もケイブの反応もな

かった。

なのに！

「助けてっ！」

「助けて！！！」

助けを呼ぶ仲間の声。

助けないと。

私が、助けないと。

もう、これ以上つ。

血溜まりを踏む。

敵のものではない。

さつきまで温度のあった、赤い。

頭が沸騰しそうだ。

それでも一番近い呼び声に向かって身体が勝手に走り出す。

前を敵が塞ぐ。

邪魔をするな！

上段から振り下ろした刃の向こう。

必死に助けを叫び続けていた喉を引き裂かれ、

倒れていく少女。

昼間は楽しげに歌を歌っていた子だった。

そして、

「——ダメっ！ いまCHARMを手放したらっ！」

武器を投げ出し隊列から飛び出したひとりの背をヒュ

ージの熱線が何本も貫いた。

焦げた肉の臭いが立ち上る。

隣では、別の少女が胴を突き刺されている。

執拗に何度も何度も。そのたびに痙攣するように身体が

跳ねる様子は……。

「——っ！！！」

冷静さ？

そんなもの、いつの間にか見えなくなっていた。

冷えているのは心臓。そこから上った血で脳が沸々と煮えたぎっている。

怒りの感情が全身を支配する。

何に対する怒りか。

それすら、いまは関係ない。

無我夢中で剣を振るった。

剣を握る腕の感覚はない。

剣を振るえているのでちぎれてはいない。

例えちぎれていたとしても。

助けを呼ぶ声に応え、縦横無尽に駆ける。

駆けつけて、斬る。

斬る。

斬る。

それでも、

間に合わない。

全然、間に合わない。

一度たりとも間に合わない！

私が、私が、守らないと！

守らないといけないっ！

止まることなく駆け続ける。

斬り続ける。

斬るたび、自身も身体のどこかが切れる音がする。

それでも、止まらない。

止まるわけにはいかないのだ。

もつれた足が、何かにつまづく。

それが何かなんて、

見たくない。

見たくなんかない。

目に入ってくるのは、助けを求め、まなざしで訴えかけ

てくる仲間の顔。

待ってて。

いま行く。

助けに行く。

だから、安心して。

向けられた表情が、微笑みに変わって。

鋭い爪が、その身体を引き裂いた。

「——っ！！」

肺の底から振り絞った声も音にならない。

呼気に鉄の味が混じる。

視界がぼやける。

眼球が熱い。そこから血が流れ出してるみたいに熱い。

……あと何人いる？

私は、あと何人を助けたらいい？

あと何人を助けられる？

あと何人を、助けることができないっ！

必死なんて言葉はどこかで通り過ぎた。

わかってる。

みんな、仲間だった。

大切な友達だった。

……もう、残ってない。

何ひとつ、欠片も残っていないっ！

残ったのは、あの子たちの最期の表情だけ。

安堵、泣き顔、絶望、苦しみ、痛み……。

……残ってない。

誰も。

私以外、もう誰もっ！

たった数分間の出来事。

それだけの時間。

それだけの時間だけで。

いまここ、この場所に立っているのは、

……。

……彼女は？

彼女は……どこ？

一番最初に引き離れた彼女の声だけ、ずっと聞こえなかった。
冷えきっていた心臓が再び強く脈打ち出す。 無事でい

る。

大丈夫だ。

きつと。

あの判断は、間違っていない。

あの判断だけは、間違っていない。

間違ってるんじゃない！

既に停止した機体を杖代わりに、来た道を引き返す。

天真爛漫な少女だった。

笑顔の似合う少女だった。

たわいのないことで、すぐににこにこして。

自分とはまるきり正反対なのに。

いつも隣にいてくれて、微笑みを分けてくれていた。

ほどけてしまった三つ編み。

いつもは無造作に束ねているのを、せっかくのお出かけだからといって出発前に部屋で結んでくれた。

演習だと言っても「お出かけなの！」と言って。うれしそうに。

鏡に映ってた自分も、つられて笑顔になっていた。

それを見た彼女もまたうれしそうにして。

なんだか気恥ずかしくなつて。

ほどけた髪先をいじる。

今日は、うれしくて、ずっとそうしていた気がする。

彼女は、気づいていただろうか。

——絢子。

彼女の遺体は、少し離れた林の中で見つかった。

彼女が倒したであろうスモール級が2体。

そしてその手にはしっかりと通信機が握りしめられていて。

(命令、ちゃんと、守ったからね)

そう言っているような満足げな表情で。
私が見た、彼女の最後の笑顔だった。

倒れていた一体の腕がかすかに動いた。

息がある。

生きている。

どうして、絢子でなくてお前が生きている？

身体を支えていたCHARMを振り上げ、その腕を切り落とした。

それから、何度も何度も、死んだかどうかなんて関係ない。

その刀身が砕けるまで。

砕けてもなお、私は剣を振るい続けた。

まるで、さっき見たヒュージと同じだ。

私は、いまどんな顔をしているのだろう。

わからない。

わからないなあっ！

「朝毎に懈怠なく死しておくべし、でしたか」

明日は我が身。そう言ってしまうば聞こえはいいですけど。

「逃げですね」

棗は言い切った。

「その手のひらだけで、一体どれだけの命が救えると、まだ信じてるんですか？」

「……似たようなことを柊様にも言われました」

それに嘆息される。

「同じですよ」

棗の声は依然冷たい。

「今ここにいる貴方は、遠く離れた地にいる誰かを救うことができませんか？」

「……それは。不可能です」

「同じです」

繰り返される。

「何人集まったところで、救える命には限りがあります」
それをいちいち背負い込んでなんていたら、先になんて進めません。

あるとき、ああしていれば。

もっと力があれば。

「そんなものは、もしも論より意味のないただの言い訳です」

「……手厳しいですね」

「別に割り切れと言ってるわけではありません」

折り合いを見つけ、自分の置き場所を見つけるんです。

……自分の置き場所。

「貴方の弱さはこの半年で大分理解したつもりですけど」

「……私はまだ、弱いですか？」

「弱いですね」

でもまあ、それを鍛えるのが私の仕事ですし。

「少しはマシになったと思いますよ」

悲しんで泣けるくらいには。

そう言って棗は意地悪げに笑った。

……敵わない。このひとには、本当に。

「さて日も傾いてきましたし。ちやっちゃと本題に移りましょうか」

そのために私が居るんでしょう？
頷く。

どこまで見透かされているのやら。

「墓前に手向けるのは、何も花だけとは限りませんからね」
そう言つて、棗は腰の二刀を引き抜いた。

私も帯刀していたヨートウンシュベルトを構える。

彼女たちの最期の姿は、今でも脳裏に焼き付いて離れない。
い。

ああ言われたが、折り合いなんて付けられるはずもなく。
その置き場所もまだ見つけられていない。

それが私の弱さ。

彼女たちのことを忘れることなど、許されようもない。

私の背負った業。

一生を賭けても償いきれない宿業。

それを傲慢と言うならば、貫き通すしかない。

自分の不器用さは自覚している。

それこそいつか言われた通り『一生仕上ぐる事なり』だ。
ならば。

私は今生を、貴方たちの分まで戦い抜いて、最期の時まで
生きてみせます。

それが私がいま求める強さ。

だから、見ていてください。

今の私を。

貴方たちが、少しでも安心して眠っていられるように。

立ち並ぶ墓前、風と共に銀の一閃が舞った。
